

## 第6講 質問文と回答欄

田中重人 (東北大学文学部准教授)

### 1 課題

つぎの各項目についてたずねる質問文 (および回答欄) を考える。調査対象としては、東北大学の日本人学生を想定すること。

- 出身地 (言語使用についての分析に使う目的で)
- ら抜きことばに対する意識
- 授業スタイルに関する好み
- 外国語会話に関する苦手意識
- 自分の家族とのコミュニケーションの頻度
- 1日の時間の使いかた

### 2 質問文作成上の注意

#### 2.1 用語について

- (1) 明確な質問
- (2) 日常的なことばで
- (3) ステレオタイプ的な表現を避ける

#### 2.2 文章について

- (1) Double-barreled question を避ける → ひとつの質問ではひとつの事柄だけを聞く
- (2) 短く、意味のつかみやすい文章に
- (3) 誘導尋問を避ける
- (4) 黙従傾向に注意

#### 2.3 質問のタイプ

- (1) 個人的質問 vs. 一般的質問
- (2) 意識 vs. 実態
- (3) actual status vs. usual status
- (4) 単一質問 vs. 複数質問群

## 3 いろいろな回答形式

### 3.1 自由回答とアフターコード

回答欄に自由に答えを書いてもらい、あとで値をあたえる (after-coding)。回答の予想がつかない場合、選択肢が多すぎる場合 (職業など)、数値をそのまま記入してもらう場合 (年齢など) に有効

自由回答の利点：

- 多面的な把握が可能
- 詳細な情報が得られる
- 誘導尋問になりにくい
- 回答者が不満を感じにくい

自由回答の欠点：

- 回答者の負担が大きい
- さまざまな次元の回答が混入する可能性
- 回答が標準化できない

### 3.2 回答選択肢 (プリコード)

あらかじめ回答の種類を制限して、値をあたえておく (pre-coding)。

- ひとつの準拠枠に沿って標準化した反応が引き出せる
- 回答者の負担がすくない
- 想定外の反応を抑制してしまう

「その他」などの選択肢を設けて、一部自由回答を併用することもできる。

プリコードの場合の注意事項

- ひとつだけ選択 (single answer) か複数選択 (multiple answer) か
- ありうる回答を網羅しているか?
- 選択肢は相互に排他的か?
- 間隔尺度としてあつかうには、最低限4つの選択肢が必要
- 選択肢が多すぎると回答者の負担が大きい (7つ以下がいちおうの目安)
- 不明・回答拒否を選択肢に入れるか?
- 選択肢のレイアウト
- 一対比較

## 4 宿題

自分の関心に沿って、質問項目を列挙してくる。完全な質問文になっていなくても、おおよそどのようなことを聞きたいかが書いてあればよい。2部作成して次回持ってくる (1部は提出、もうひとつは授業で使用)。